

誰よりも優しい人

宮崎県立宮崎西高等学校 二年 江藤 遥名子

「なんで『障がい者』を『障害者』って書くのかな。」

昔、母が言ったこの言葉を私は今でもずっと忘れずにいる。

「障がい」と言っても、精神、発達、知的、身体と種類は多くあり、障がいの「程度」もサービスや保険などに応じて細かく区分される。

今年で二十一歳になった私の姉には「自閉スペクトラム症」と「知的障がい」がある。程度は重度であると診断はされているらしいが、私は姉の症状がそこまで重いつつたことはない。運動は出来るし会話だって成り立つ。記憶力も私より断然良い。ただ知識のいる作業が苦手で、人より興奮しやすい性格なだけ他の人と何も変わらない。それでも昔は姉に障がいがあることが恥ずかしくて、母に姉を自分の学校行事に連れて来ないで欲しいと言ったことがあった。小学校低学年の運動会の日、姉の周りにいた人達が明らかに姉の姿を見ながらヒソヒソと話しているのに気付いたから。その時、姉は普通の人とは違つと、言葉は悪いが正直、屈辱だった。当時のことを思い返すほど私の姉への態度はただの八つ当たりでしかなく、決して家族であり、姉である人にかける言葉ではなく、今でもずっと自分がしてしまった行動に後悔している。

姉のことを理解しようと思い始めたのはいつ頃からだったか、正直よく覚えていない。ただ、幼い頃から何となく思っていたのは同じく障がいがある人、その家族、皆明るくて優しい人達ばかりなのだということ。不思議なくらい姉の周りは常に笑顔が絶えず、今思うとその光景は決して当たり前ではない。本人達の苦勞や家族の思いをお互いが本心に理解し合えているからこそなのではないだろうか。

今現在、障がいのある人へ向けて様々な支援の取り組みが行われているが、私はその取り組みが本当に生かされているのか疑問に思うところがある。仕事に就きにくく、就いたとしても収入が低い、何より障がいへの理解度が低すぎる。障がいがあるからといって全てのことを一人で出来ないわけではない。美的センス、記憶力、計算力など、人より何倍も長けた能力を持つ人もたくさんいる。その人の「出来ないこと」より「出来ること」に目を向けることが理解することへの一歩だと私は考える。

そして、私が一番思っているのは、「障がい者」という言葉に「害」という文字を使わないで欲しいということ。本、新聞、テレビ、法律にまで「障害者」という表記がされている。

「なんで『障がい者』を『障害者』って書くのかな。『害』なんかじゃないのに。」

ニュースを見て、悲しそうに、少し怒ったように言った母の表情を、何年か経つた今でも鮮明に覚えている。私は母のその言葉を聞いて以来、「障害者」という表記に敏感に反応するようになり、それを見ては今でも何とも言いがたい、腹立たしい気持ちになる。そもそも「害」という文字は「災い」「傷つける」といった悪い意味をもつ。「がい」と「害」が同じ発音だからと言って使って欲しくない。姉は誰かを傷つけることもなければ危害を与えることもない。他の障がいのある人にだって同じことが言える。

少し前、知的障がい者福祉施設が襲われ、罪のない多くの人が亡くなった。障がい者だから、という理由だけで命を奪われた人達、頭を殴られたような衝撃で、ニュースを見た母は泣いていた。その事件が起きてから図書館に行つては「障がい者について」の本をたくさん読んだ。家族が、私が姉を守らないといけないと障がい者支援学校の教師の仕事についても調べていた。障がい者を良く思わない人がいることで姉もいつか狙われてしまうのではないかと凄く怖くなった。障がい者にも、そうでない人にも得意、不得意があるのと同じことだ。例えば障がいがあったとしても、その人も一人の人間であり、決して必要のない存在ではない。姉は家族にとって、皆を自然と笑顔にする大切な存在で、私にとって姉は誇れる人。誰かが苦しい時には必ず声をかけ、悲しんでいる人を見ると心配になって自分も一緒に涙を流す、そんな誰よりも優しい姉のような人に私はなりたい。

父

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校

一年

宮原

早輝

父は障がい者です。去年の九月、脳卒中で倒れ後遺症が残りしました。とても悲しく辛いことです。しかし、私はこのできごとで少し成長できたと思います。

私は不登校でした。この日は学校へ行けない子どものための学校へ行きました。「髪がうねるから雨は好きじゃないなあ、相変わらぬ隣に座っている人の杖は邪魔だなあ」とくだらないことを思いながら電車に乗って行きました。勉強をしていると母から電話があり

「お父さんが倒れた。」

と言われました。突然のことで頭のなかは戸惑いでいっぱいになりました。

「どういうこと？お父さんは大丈夫なの？なにがおきたの？」

父は脳卒中で倒れました。

なんとか一命をとりとめましたがあと少し処置が遅ければ・・・考えたくもない結果になっていたそうです。それくらい重い症状でした。人工呼吸器をつけ、動くことはもちろん言葉も話すことができなくなってしまいました。

「もう二度と父と会話することができないんだ・・・。もう二度と一緒にモトクロスできないんだ・・・。心に穴が開いたようだったこのいうことを言っただなあ」

と面白くもないのに涙と一緒に笑っていました。

「コロナウイルスの影響で父とは会えないまま二週間が過ぎたころ、嬉しい知らせが入りました。父が少しだけ話せるようになったということでした。私は中学受験に合格したときよりも嬉しかったです。

「早く話したい！少しでもお母さんの代わりに料理ができるようになったんだよ!! 得意料理はお父さんの好きなたらこクリームスパゲティなんだよ!! だから早く元気になって退院してほしいよ!!」

ヶ月後。十メートル離れたところから十分だけ電話で会話することが条件でした。父に会ってまず何よりも最初に出た言葉が「痩せたね」でした。父は身長は百七十五センチなのに体重が百キロ近くまであったのでお相撲さんみたく

でした。しかし、車いすに座って小さく手を振り微笑む父は風に吹かれたら折れてしまいうので、まるで棒のようでした。以前のよう「で〜んと座ってガハハと笑う父はもういないんだなあとても悲しく、でも生きていて、また会えたことがそれ以上に嬉しい複雑な気分でした。父は

「まず話せるようになって、物が握れるようになって、そしてベッドから車いすまで体を起こすことができるようになった。」

と詰まりながら、でも一言一言一生懸命話してくれました。会って会話することがどれだけ幸せなことであるか痛いほどわかった気がしました。

そこから、父は歩けるようになるまで入院しながらリハビリをして、半年ぶりに家へ帰ってきました。触れられる距離に父がいることが久しぶりでとても照れくさかったです。

私は家族みんなで買い物をしたり、公園へ体を動かかしに行ったり近々の山へドライブに行ったりと家族の時間を以前以上に大切にできるようになりました。そこである二つのことに気づきました。店や公園ですれ違う人、立ち寄った飲食店で出会う人、みんな、父のことを気にしていることなめまわすように「見る」ことです。残念ながら父は右半身に後遺症が残り、杖をつけて右足を引きずりながらでしか歩けません。そんな父を珍しそうな不快そうな迷惑そうな『冷たい目』で見ている人です。また、父と話するときバカにするように会話をする人をときどき見ます。もし私がそんな『冷たい目』や会話、態度を他人にされたら「人として生きていく意味がないんだ」と言われている気がして「死んだほうがよかったです。強いか・・・」と考えてしまうと思います。しかし、父はどんなことがあっても決して私たちの前では暗い顔をしません。強い心を持っているからだだと思います。私は、「父はこんなに頑張っているのに冷たい目でしか見られないのか」と腹立たしく思います。しかし、私も障がいのある人へそんな『冷たい目』を向けていなかったかと振り返ると自信を持てません。私も父が倒れるまではその『冷たい目』の持ち主でした。私はそんな『冷たい目』を向けられている人たちにも「生きていく意味』『人権』があると思います。

今、私は父の頑張りに負けないように頑張って学校へ登校しています。

東京パラリンピックが開催されています。私も父やパラリンピック選手、障がいのある人のように「強い心」を持って生きたいと思いました。

夢

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校 一年 若林 寿弥

人権。法務省のホームページにはこうある。「人権」という言葉からあなたはどんな印象を受けますか。『とても大切なもの』それともー。『人権』とは『すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利』あるいはー。」と。初めて意味を理解した。今まで人権を果てしもなく大きくくりで捉えていた自分にとって、ハードルが高いように思えた。誰だって、何かを我慢しながら、行きつきたいゴールを見失いながら生きている。しかし、これを実現できたら皆何かにおびえることなく生きることができると。その何かにおびえていた私も、互いが幸福を追求できるお手伝いをすれば、皆が人権を全うできる社会になるのではないかと思った。そして、今の夢にもつながるのではないかと思った。

私の夢は、街に誰もが気軽に来られる相談所を作ることである。現在、行政が行っているサービスとして、いじめや人間関係に関する電話相談などがある。しかし、スマートフォンなどの通話機器を持っていない人は利用することができない。そこで、機器類を持っていなくても相談ができる相談所を作ろうという訳だ。そして何より、人の顔を見て話した方が断然気持ちが和らぐからだ。

私は中学生のときに嫌がらせを何度も受けたことがあった。それこそ自分の幸福を追求できない状態にあった。しかし、スクールカウンセラーの先生に話を聞いてもらったことをきっかけに、だんだんと心に余裕ができた。人間的にも成長することができた。

声や文字だけの相談でも悩みは解決できるかもしれない。しかし、実際、スクールカウンセラーの先生と話をして、自分の悩みに共感してくれる感情の温かさは表情を見て、初めて感じる事ができた。自分の悩みに共感してくれることで、人は安心することができる。それをその場の雰囲気、声、表情とともに実感すること、人はまた自分の人権を守られているように感じるのではないだろうか。私はそれを体験せずに悩みを抱えてしまっている人たちの手助けをしたいと思い、この夢を思い描いている。

また、私もスクールカウンセラーとして働きたいというのももう一つの夢だ。理由としては、先程のような皆が人権を全うできるようにする、つまり自分と同じように悩みを抱えている人の心のモヤモヤを一緒に取り除く手伝いをしたいからだ。

そのときに大事にしたいことがある。それは「共感することだ。先程、自分の悩みに共感してくれることで、人は安心することができる」と述べた。私自身、目の前の人に自分の気持ち・悩みを共感してもらったことで、心に余裕が生まれるようになったと言える。しかし、ただ共感するのではなく相手の気持ちに寄り添うことを忘れないようにしていきたい。中学生のときにリウマチ科の病院に職場体験へ行った際、看護師の方が患者さんに話を聞くときに、うなずきながら患者さんの気持ちに寄り添っていた。後で話を聞くと、リウマチは完治が難しく、それによって精神的にうつむきがちな患者さんもいるから、共感することが患者さんに安心してもらう第一歩なんだよと教えてくださった。この経験から、私は「共感すること」が人とのコミュニケーションにおいて大事だと考えている。また、私生活の中でもそれができるように意識付けをしている。

私はこの二つの夢を実現させて、悩みを抱えている人を減らし、互いの幸福を望み合う社会にしていきたいと考えている。また、困ったときにそれぞれ頼ることのできる人を見つけ合えるようにしていきたい。人権問題には、女性差別問題、いじめ、障がい者差別などさまざまな形がある。それらの悩みを聞き、まずは自分が一人ではないこと、いつでも誰に頼ってもいいことを知ってもらえるような人に私はなりたい。そして人権問題にもっと目を向けてもらえるようにしていきたい。

女性の人権

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校 一年 野崎 ひなた

日本の女性は、一九四五年に初めて参政権が認められ、一九八五年に男女雇用機会均等法、一九九九年に男女共同参画社会基本法が制定された。男女共同参画社会とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」だそうだ。

しかし、まだ完璧に男女平等とは言えないのではないだろうか。

スポーツを通じ、平和でより良い世界を構築するためのオリンピック。でも、東京五輪大会組織委員会前会長の女性への性差別発言。国会の女性議員の割合の少なさ。女性へのセクハラやDV。

「女性だからといって、差別されるべきではない。」当たり前なこと、皆が正しいと思っていると。しかし、昔からの「男性は仕事、女性は家庭」という先入観によって考えを変えられなくなってしまったのではないだろうか。

私は以前、テレビで「イクメン」という言葉はおかしいと言っている芸能人を見たことがある。私はその通りだと思った。共働きの夫婦でも、妻が子どものお世話するのは当たり前で、夫が育児を手伝ったら、「イクメン」と言って称賛される。自分の子どもを育てるといふことは、育児休業の取得率によく表れているのではないかと思う。二〇一九年度のデータでは男性の育児休業取得率は約七・五%、女性は約八三%だった。この結果からみても、男性の育児への参加は少ないのではないかといえる。しかし、育児休業を男性が取得することは、今の時代まだ理解が得られないかと思う。その根本にはやはり、「男性は仕事、女性は家庭」という意識があると思う。その意識をなくすことが、男女で協力し育児をすることになり、男女共同参画社会へと繋がっていくと思う。

私の母は以前勤めていた会社を辞める時に「お前の代わりなんて、いくらでもいる。」などという心無い言葉を周りから言われたそう。正直、母も差別を受けたことがあると聞いた時、びっくりした。こんな身近でも差別があるなんて思わなかった。

しかしよく考えてみれば、そういう発言を日常生活でも耳にすることがある。「男の子なんだから」「女の子なんだから」知らず知らずのうちに私にも、そのような考えが教えられていたと思うとぞっとした。私は小さい頃、「ひなた」という名前が嫌だった。理由は男の子みたいだから。人から名前を呼ばれる時、「ひなたくん」と一度呼ばれることが多かった。「もっと女の子らしい名前が良かった。」そう親に言ったこともあった。でも、両親は「太陽みたいにあたたかい人になってほしい」と思ってこの名前をつけたんだよ。」と言うだけだった。今思えばせっかく考えてつけてくれた名前なのにひどいことを言ってしまったと思うし、良い名前だと思っている。名前に性別なんて関係ないと思うようになった。子どもうちに教えられたことは、大人になってもその人の考え方に大きく関わってくるものだと思う。だから、皆が努力して少しずつ変えていくべきなのではないだろうか。これからの時代は女性差別で苦しむ人がいなくなるように。一人一人が意識を変えていくしかない。

もちろん、男性の方が体力があったり、女性の方が細かい作業が得意だったり、向き不向きもあると思う。でも、性別によって就ける仕事制限されたり、学びたいことが学べなくなったりしてはいけない。

女性差別をなくし、男女共同参画社会を作っていくには、一人一人が意識して少しずつ変えていくしかないと思う。皆の考え方を変えていくのは、とても時間がかかることだと思う。でも、一人一人が意識すれば確実に変わっていく。私も相手を思いやる気持ちを忘れず、自分の得意なことで活躍できるように頑張りたいと思う。